

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025 年 4 月 28 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 人文科学研究所

職 名 教授

氏 名 宮宅 潔

助 成 の 種 類	令和6年度 ・ 研究活動推進助成		
申請時の科研費 研究 課 題 名	中国統一を生んだもの／中国統一が生んだもの:新たな秦史像を探る国際共同研究		
上記以外で助成金を 充 当 し た 研 究 内 容			
助成金充当に関 わる共同研究者	(所属・職名・氏名)		
発表学会文献等	(この研究成果を発表した学会・文献等) 国際シンポジウム「新出土秦漢簡牘国際学術研討会」、2024年8月8日、京都大学人文科学研究所 国際シンポジウム「中国簡帛学国際論壇2024」、2024年10月26-27日、香港・香港浸會大學饒宗頤國學院 「岳麓書院所藏簡《秦律令(貳)》訳注稿 その(二)」『東方学報』京都 第99冊、2024		
成 果 の 概 要	研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、添付して下さい。(タイトルは「成果の概要／報告者名」)		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	1,250,000 円	
	使用した助成金額	1,250,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	費 目	金 額
		旅費	469,480
		謝金	390,000
		図書	172,686
		消耗費	122,484
		印刷費	88,000
通信費		4,650	
保険費	2,700		
当財団の助成につ いて	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 昨年度の科研費は不採択であったものの、貴財団からの助成により、研究集会の共催を継続して行うことができた。実績を重ねたうえで再挑戦し、今年度の科研費を獲得できたのは、この助成によるところが大きい。今後とも同様の事業を継続してくださることを、切に希望する。		

成果の概要／宮宅 潔（人文科学研究所）

○研究内容およびその成果

本研究課題では、中国（武漢大学）・韓国（ソウル大学）との国際的な協力体制の下での文献精読と、文献学以外の研究者との協業とを組み合わせ、多角的な視座から秦による「統一」の背景と意義とを再定義することを目指した。同様の企図を持って申請した2024年度の科研費補助金は、残念ながら不採択に終わったものの、再度の挑戦に向けて国際的な協力関係をいっそう深化させるべく、国際シンポジウムの共催やそれへの参加を進め、さらに関連するワークショップや研究会を企画・実施した。

まず、8月に中国・武漢大学簡帛研究中心との共催で、国際シンポジウム「新出土秦漢簡牘国際学術研討会」（8月8日、京都大学人文科学研究所）を開催し、中国側4名、日本側4名が、秦代の法律条文や行政文書に関する研究報告を行った。10月には武漢大学が香港浸会大学と共催した国際シンポジウム「中国簡帛学国際論壇2024」（10月26-27日、香港・香港浸会大学）に宮宅が参加し、「戦争与貨幣—秦的占領統治与半両銭的流通（戦争と貨幣—秦の占領統治と半両銭の流通）」の題目で研究報告を行った。12月6日には研究協力者の菊地大樹（中国・蘭州大学）を日本に招へいし、ワークショップを開催し、秦漢時代の軍事エリート研究の可能性や、近年の秦文化に関する新たな考古発見と関連研究について意見を交換した。同じ月の10日にはオンラインで「戦国秦漢簡牘研読会」を開き、日・中・韓の若手研究者が研究報告を行った。

これらとともに、同様の国際協力体制の下に、岳麓書院所蔵簡《秦律令（貳）》の会読を定期的に行い、訳注を作成し、それを『東方学報』京都（第99冊、2024）に発表した。この訳注とともに同誌に掲載された宮宅潔「秦代県尉小考：その職掌よりみた占領統治の実態」もまた、本研究課題による成果の一部である。

○今後の見通し

研究助成を得て、本研究課題を切れ目なく継続できたことにより、協力体制はより盤石なものとなり、研究者相互のあいだでの問題意識の共有も進んだ。その効果もあって、再挑戦した科研申請は、今回は無事に採択された（基盤研究(B)「中華帝国の誕生とその継承：秦漢期の統治制度と集団自意識の複眼的考察」2025～2029年度）。2024年度に行った研究活動を継承・発展させ、新しい研究成果の獲得を目指したい。